

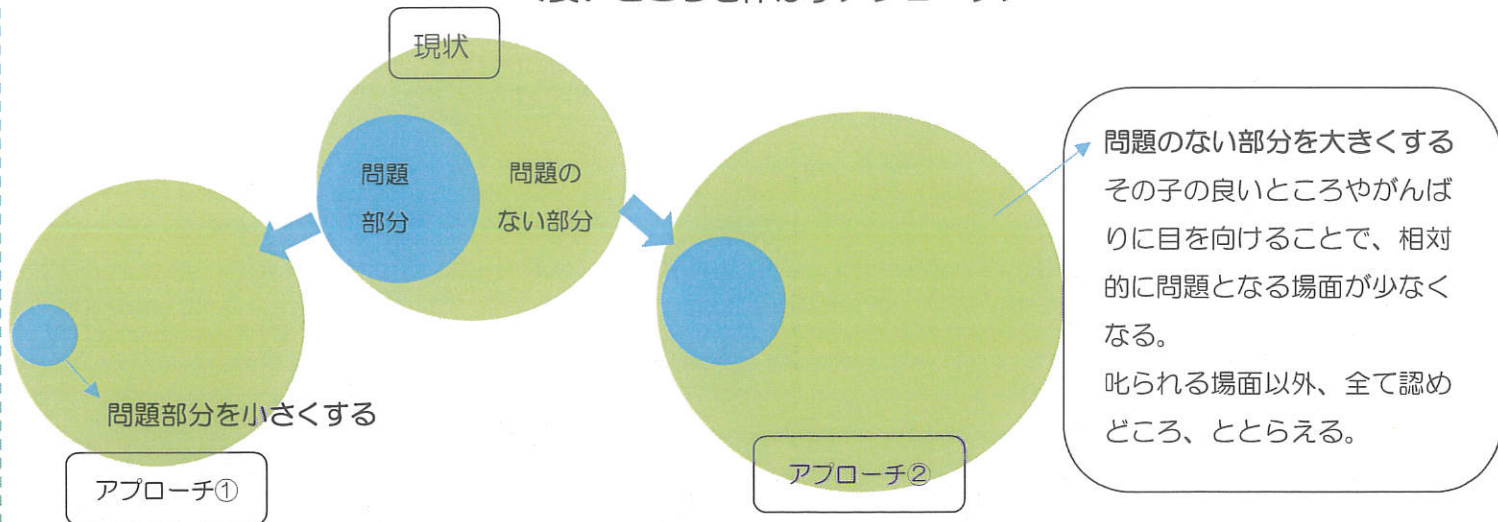
かなでだい

令和4年
8月1日発行
8月号

日に日に日差しが強くなってきましたね。暑さには負けず、体調管理をして元気に過ごしていきたいですね。6月・7月に引き続き、前向きに取り組むための基礎となる「自信」のつけ方、第3段をお伝えいたします。

【川上康則監修 書籍「発達の気になる子の体のうごきしくみとトレーニング」から引用しています】

＜良いところを伸ばすアプローチ＞



ここではアプローチ②を視野に入れつつアプローチ①に少し踏み込んでいくというスタンスをとっています。そのため、つまずきの背景をしっかりと読み解き、無理なく継続的に取り組めるように子どもの気持ちを支えていただきたいと思います。

＜良いところを伸ばして自信を育てる＞

苦手を克服するのは容易なことではなりません。つまずきを軽減するには、いきなり問題部分を直したり変えたりするのではなく、まず良いところや頑張っている部分に目を向けます。そこを伸ばすことで、子どもの前向きな気持ちにつながります。

良いところを伸ばそうとかがかわると相対的に問題部分や困ったところが小さく見えるものです。

こどもの自信を支えるためには、こうした土台となる関わりが必要です。



＜「人間のよさ」を感じると、やる気を引き出せる＞

つまずきのある子どもたちは教師や友達から一方的にサポートを受ける存在になりがちです。それが自己肯定感の伸び悩みになっていることがよくあります。

彼らも「他者に必要とされたい」

「誰かの役に立ちたい」という気持ちをもっています。

自分の周囲に頼られる存在であることを実感したり、友達や周りの大人から「ありがとう」と感謝される体験をしたりすることで「人間っていいな」「友達っていいな」と感じられるようになります。それによって「これもやってみよう」というやる気を引き出されます。「自分は必要とされる存在だ」という実感が自尊心を育むことにつながります。



＜援助を求めるスキルも身につける＞

生きていく上で失敗したり、上手くいかずに困ったりすることは誰にでもあります。そんなとき、ごまかしたり隠したりせず、周囲に助けを求め、自分で解決する方法を探せるようにするスキルを身につけることも必要です。

しかし、他者に援助を求めることは自尊心が低い子どもにはハードルが高く、なかなかできません。

「助けてもらえないかもしれない」あるいは「叱られるかもしれない」と考え、傷つくことを恐れて援助を求めることができない場合が多いです。これを改善するためには、例えばグループ活動などで困った場面を設定し、援助を求める必要があるシチュエーションを設けます。そしてその子にグループの代表として報告や援助を求める役割を担ってもらい、実践を積み重ねるようにします。こうした援助要求スキルは自尊心を育てることとセットで行うことが大切です。

自尊心が育まれていくと、他者に援助を求める行動もスムーズに行えるようになります。

